

特別寄稿

ドイツ語とわたし

川崎医科大学 外国語教室

荒井 隆

(平成10年3月20日受理)

Deutsch und Ich

Takashi ARAI

Department of Foreign Language

Kawasaki Medical School,

Kurashiki, 701-0192, Japan

(Received on March 20, 1998)

概 要

わたしがドイツ語というものにはじめて接したのは、かなり久しく高校1年生の時だったと思う。そのあと大学時代、教職に就くようになってからも、これまでずっとドイツ語とともに歩んできた。以下、わたしの人生の一端について述べる。

Resümee

Die erste Begegnung mit der deutschen Sprache ist schon lange her. Wenn ich mich recht erinnere, war das als ich in der ersten Klasse an der Höheren Schule war. Danach, während der Universitätszeit, und auch im Lehrberuf habe ich ständig mit Deutsch gelebt. Im folgenden beschreibe ich mein Leben.

1. はじめに

このたび川崎医学会誌・一般教養篇(平成10年度・第24号)に自分のこれまでやってきた教育・研究などについて原稿を書くように依頼されましたが、さてどんなテーマで書いたらよいものかと考えていたとき、これまでに自分の歩んできたことを述べてみよう、ふと頭に浮かびました。主旨に相応しい文章かどうか気になるところですが、「ドイツ語とわたし」と題し拙文を呈する次第です。

2. 高校時代

わたしがドイツ語というものにはじめて接したのは、いまから47年前に溯ります。昭和26年(1951年)に東京・目黒区自由ヶ丘にある自由ヶ丘学園高等学校(普通科)の1年生になってからです。(仄聞では、校名が後に町名となり、駅名までも自由ヶ丘となったようです)自由ヶ

丘学園高校は、昭和6年(1931年)に創立された私立の男子校で、その頃の校長先生は、故・藤田喜作先生でした。藤田先生は、東大の教授職を辞し、私財を投じて学園の創設に尽くされた方だと伺っています。まず忘れ難いことは、わたしが高校入試に受験した時のことです。当時の選抜試験には筆記試験はなく、書類選考と校長先生の面接だけだったと思います。わたしは家庭の事情で横浜・武相中学校を1年で中退した後に、公務員(警察職員)として勤務していたため、現役と同級生よりも3歳年長で、高校入試に志願したわけです。中学を卒業していなかったわたしを、特別に入学を許可して下さいました。あとで「はじめてのケースで、異例のことだよ」と言われたのを聞いたことがあります。いまでも有り難く感謝しております。

わが高校の特色のひとつに、第2語学の制度を設けていたことです。未だ全国的にも少なかったと思います。外国語科目には、英語が必修科目のほかに、ドイツ語とフランス語が選択科目として開講されていました。語学は週に1コマの授業で、1年から3年まで通年で行われていました。その頃のわたしは、はっきりした理由もなくただ漠然とドイツ語を選択しました。はじめて手ほどきをして下さった先生は、故・三木繁先生でした。三木先生は、哲学者・三木清氏の実弟であり、東大で哲学を専攻されたと聞いております。わたしたちの担任でもあり、ドイツ語のほかに英語と社会(時事問題)の教科も教えていました。最初の授業のとき、三木先生はいきなり原語(ドイツ語)で、ドイツ・リート「野ばら」(Heidenröslein) [ゲーテ作詞・シューベルト作曲]を朗々とうたわれて、驚嘆したことを覚えています。ドイツ語特有の発音が強烈な印象として残っています。大きな言い方をすると、この出会いがのちにわたしの人生の方向を決めたように思います。

三木先生の授業は、きびしかったが、実に分かり易く、また丁寧に教えて下さり、ときには英語と対比しながら文法を説明されて、理解が深まりました。そのときに、採用されたテキストは、手塚富雄・星野慎一共著の「基範ドイツ文法読本」というので、発行所は第三書房(昭和24年2月発行)でした。いまでもわたしの手元にあります。活字はドイツ文字、いわゆる亀の甲文字で刷られ、あの頃のことが懐かしく思い出されます。

3. 大学時代

わたしは、高校を卒業したのは、昭和29年(1954年)でした。卒業できたときは、とても嬉しかったと同時に、ほっとしたのが実感でした。その年に大学進学を考えていましたが、学費の工面ができず、己むを得ず受験を断念し、翌年に、かねてからの志望であった中央大学の法学部を受験しました。だが、準備不足がたたり不合格でした。浪人するのは許されないので、次の試験日が迫っている文学部に受験して、ようやく合格できました。

当時の文学部(昭和26年に開設)は、新設されてからまだ歴史も浅く、大半の学生は2年後に、法学部の転部試験を受けて移籍する者が多かったのです。わたしもその頃は不謹慎な考えを持ち、腰かけの積もりでした。いま思うと、ほんとうに恥かしい限りです。

文学部の文学科には、国文専攻・英文専攻・独文専攻・仏文専攻の四つの専攻に分かれてい

ました。大学1年は、一般教養系の所要の単位(科目)を履修するほかに、語学演習、俗に語学ゼミと称し、必修科目で、(国)(英)(独)(仏)語の中から1科目を選択する必要がありました。わたしは、躊躇せずにドイツ語を選びました。これが後に独文専攻につながることになるのです。その当時、文学部独文の教授陣には、錚々たる先生方が揃っていました。文学部長の吹田順助先生(特殊講義担当)をはじめ、高橋健二先生(独文学概論)、橋本文夫先生(独語学概論)、菊盛英夫先生(特殊講義)、山口忠幸先生(講読演習)、山口四郎先生(特殊講義)、浜川祥枝先生(語学演習)など、豪華な顔ぶれでした。そして東大からは国松孝二先生、山下肇先生、藤本淳雄先生、また外語大からは藤田五郎先生、学習院大からは、ドイツ人のロベルト・シンチンゲル(Robert Schinzinger)先生など、老練な先生方が講義に来られていました。

大学2年になったとき、法学部3年編入の転部試験を受けるべきか否か、ひどく逡巡しましたが、結局このまま独文に在籍して勉強していこうと決意を固めました。わたしにとって最も大きな感化を受けたのは、二人の先生からでした。そのひとり、高名な独文学者・故高橋健二先生(日本芸術院会員・中央大学名誉教授)の独文学の講義であったと思います。ゲーテ、レッシングからヘッセ、ケストナーまでの詩句、ことばを教えられ、深い感銘を受けました。なかでもヘルマン・ヘッセ(Hermann Hesse)(1877-1962)の「霧の中」(Im Nebel. 1906)の詩は忘れられません。その詩を次に挙げてみようと思います。

Im Nebel	H. Hesse	霧の中	H. ヘッセ
Seltsam, im Nebel zu wandern!		不思議だ、霧の中を歩くのは!	
Einsam ist jeder Busch und Stein,		どの茂みも石も孤独だ。	
kein Baum sieht den andern,		どの木にも他の木は見えない。	
jeder ist allein.		みんなひとりぼっちだ。	
Voll von Freunden war mir die Welt,		私の生活がまだ明るかったころ、	
als noch mein Leben licht war ;		私にとって世界は友達に溢れていた。	
nun, da der Nebel fällt,		いま、霧がおりると、	
ist keiner mehr sichtbar.		だれももう見えない。	
Wahrlich, keiner ist weise,		ほんとうに、自分をすべてのものから、	
der nicht das Dunkel kennt,		逆らいようもなく、そっとへだてる	
das unentrinnbar und leise		暗さを知らないものは、	
von allen ihn trennt.		賢くはないのだ。	
Seltsam, im Nebel zu wandern!		不思議だ、霧の中を歩くのは!	
Leben ist Einsamsein.		人生とは孤独であることだ。	
Kein Mensch kennt den andern,		だれも他の人を知らない。	
jeder ist allein.		みんなひとりぼっちだ。	

(高橋健二訳)

ヘッセの詩のなかで最も有名な詩です。「青春詩集」(Jugendgedichte) (1950)に収められており、ヘッセが29歳ごろの作品です。また、ヘッセの小品「詩人」(Der Dichter) (1913)は、つよく心を惹きつけられました。かつて高橋先生の講読演習のとき、ヘッセ自身の朗読のテープを、わたしたち独文学生に聞かせて頂いたことがあって、感動したことを憶えています。

他のひとは、故・橋本文夫先生の独語学概論を受講したことです。わたしにとって生涯忘れられない恩師です。講義に使用されたテキストは、関口存男著の「新ドイツ語文法教程」(三省堂)でした。ハードカバーの分厚い文法書で、かなり難解な箇所が多くあって苦心しましたが、徐々に興味が湧き、勉強に打ち込めるようになりました。橋本先生は、下調べを怠ってきた学生に対しても決して怒った表情を見せず、だれにでも懇切丁寧に教えて下さったのが印象的でした。

また、わたしは別に教職課程の単位(科目)を履修していたのですが、大学4年になると、2週間の教育実習(実習校は中大付属高校)に参加しなくてはなりません。そんなとき独語科教育法も担当されていた橋本先生は、わざわざわたしたち学生数名をご自宅に呼んで、教育実習の実施にあたっての細かな指導をして下さいました。お陰で実習は首尾よく終わり、卒業時にはドイツ語の教員免許状(高校・中学)を取得することができました。そしてまた、卒業論文を書くときも、お世話になりました。指導教授でもあった橋本先生は、不慣れなわたしに和・洋書の文献を逐一ご教示して頂きました。卒業論文をなんとか期限までに仕上げ提出することができました。古い話ではありますが、そのときの卒論の題目は、「ドイツ語・前置詞の格支配について」だったと思います。いまでは難しいテーマを選んだものだと思っています。

卒業を間近にひかえ、わたしはまだ就職が決まっていなかったので、不安な日が続きました。若し就職できなければ、2年前から臨時店員として働いていた東京・東横百貨店(現在は、東急百貨店)で引続き勤めようと覚悟をきめていました。昭和34年(1959年)3月初旬、久しぶりに中大文学部の後楽園キャンパスに出かけて行ったところ、求人募集の掲示板に目が止まりました。「独文専攻で、ドイツ語が堪能な人を求む。…武蔵野音楽大学」ダメモトの心境で、即座に中大人事部に行って応募したのです。わたしは就職用の書類を既に人事部に提出していたのが幸いでした。すぐに人事部長の若林勝太郎先生の面接を受けました。質問を受けた後、紹介状を書いていただき、その翌日、武蔵野音楽大学音楽学部長の故・福井直弘教授(後年、同大学学長)を訪ねるように言われました。そして当日、東京・練馬区江古田にある武蔵野音楽大学を訪ねました。すぐに福井学部長の面接を受けて正式に採用が決まりました。まことに幸運なことでした。そして数日後には文学部を卒業できました。

4. 武蔵野音楽大学に就職

わたしは、昭和34年(1959年)4月より武蔵野音楽大学の教壇にはじめて立つことになりました。当時26歳のときでした。いきなり音楽学部器楽学科1年生のドイツ語・週3コマの授業と外国人(台湾)留学生対象のドイツ語の補講を担当させられました。当時の主任教授は、故・

大野勇二先生で、ほかに専任講師が3人おりました、わたしは助手の身分でした。早くも1ヵ月が経過し、学部長の福井先生から独文の書簡を日本語に翻訳するように言われました。わたしは日夜にかけて辞書と首っぴきで訳した記憶があります。あとで判ったことですが、この年に武蔵野音楽大学が創立30周年を迎え、5月に記念式典が挙行されることになっていました。その書簡とは、本学名誉教授であるヘルマン・ウーハペニツヒ (Hermann Wucherpfnig) 先生がドイツ本国からその式典を祝って送られてきたものでした。記念式典の際に、「30周年のあゆみ」という記念誌が発行されましたが、その中にわたしのささやかな翻訳文が載っているのに気付きました。

それ以後、わたしは武蔵野音大に勤めてからも、橋本先生の独語学の講義が聴きたくて、中大の東京・神田駿河台のキャンパス（現在は、東京・八王子市東中野）に通い、予め先生のご了解を得て聴講させて頂きました。はじめの2年間は、もぐりの聴講生(?)でした。あとの1年間は正規の聴講生として、先生の名講義を拝聴できたことは、まことに幸甚でした。

橋本先生は、ドイツ語学の権威であり、また大著「詳解ドイツ大文法」(三修社)の著者としても知られていました。ドイツ語のほかに、哲学・宗教の世界にも造詣が深く、哲学者・カール・ヤスパース (Karl Jaspers) の研究者としても知られ、これまでに幾多の足跡を残されました。個人的なことですが、わたしが昭和50年(1975年)にはじめてドイツ語の教科書(要説ドイツ文法・三修社、第19版で以後絶版)を著わしているときに、橋本先生はわたしの拙い原稿を全部目を通して下さり、誤りを見つけると、一点一画おろそかにせず朱書して頂きました。そして自ら出版社に相談して出版の労をとって下さったのです。その後も先生のご好意によってドイツ語のテキスト3点を郁文堂から出して頂きました。

それからあと、わたしは専任講師としてドイツ語教育に担当の傍ら、学生部委員も兼ねていたので、学生との接触もしだいに多くなりました。昭和43年(1968年)頃から学生運動とか学園紛争が燎原の火のように全国各地の大学に波及し日増しに激しくなりました。わが武蔵野音大も例外ではなく、学生運動が生じて不愉快なことを何度も経験させられました。学生側の要求には、学園の民主化・学費値上げ反対・大学改革問題など、政治問題もふくめ激化の一途をたどり、授業をしばしば中断あるいは休講する事態も多々起こりました。立看(立看板の略)、未届集会、ピラ配布などで学生側と押し問答、小ぜり合いをした苦い思い出があります。

昭和45年(1970年)にはいると、ようやく大学紛争も下火になり、武蔵野音大も正常な状態に戻ってまいりました。だが、わたしは教育や研究に没頭する気にならず苦悩の日が続きました。気分転換にいろいろと試みてみたものの、なかなか脱けだせなかったのです。

「六十の手習い」と古諺にあるように、また子供の頃から字を書くことが好きだったこともあって、いまから「書道」を習ってみようと思いつきました。当時たまたま毎日新聞に、毎日書道展の大賞を受賞された梅原清山先生(後年、毎日書道展審査会員)の記事を知り、即刻梅原先生のご自宅(東京・新宿区下落合)を訪ねて、書塾(書道研究・書人社)にはいりたいと頼みましたが、にべもなく断られました。しかし諦めずにふたたび訪ね、ようやく教えを受

けることができました。はじめは、平がなから始めて、次に漢字・隸書を習いました。自宅で手本を見ながら何十枚も書いてから、その清書数枚を週1回書人社に持参して、添削してもらう方法です。本務の合間に、書道を3年間習い、一般部の2級まで昇級し、いくらか気分を変えることができたと思えました。しかし完全に立ち直るまでにはなりません。そこで学生時代から存じ上げていた故・宮坂悟朗先生(東北学院大学教授・農業経済学)ご夫妻に相談してみました。そのとき話し合っている中で奥様は、微笑みをうかべて言われました。「これまでに荒井さんが一番長くやってこられたものは何ですか。それを今後も続けることが良いのではないのでしょうか」と。いまでもはっきりと憶えております。そのひと言が心に残り、わたしにとって貴重なお言葉でした。それ以来なんとか立ち直ることができ、お陰でこれまで教員を続けてこられたと思っております。

5. 川崎医科大学に勤務

昭和53年(1978年)1月、中央大学教授・橋本文夫先生から「川崎医科大学のドイツ語の専任に推薦したいから、できるだけ早く返事をください」とのご連絡を頂きました。わたしはいへんびっくりしました。有り難いお話しでもあり、熟慮のうえ承諾しました。3月上旬、当時川崎医科大学副学長の故・松本邦夫先生から就任の要請を受けて、4月1日付で正式にドイツ語専任教員に決まった次第です。当時、外国語(独語)教室の主任教授であった野田四郎先生の後任として赴任してまいりました。これから新しい職場で、学生の教育に携わり果たしてその任を全うできるかどうか一抹の不安がありました。川崎医大の同僚の先生方から励まされ、かつ親しく教をいただき徐々に職場に慣れてまいりました。爾来、なんとか教育・研究に打ち込めるようになり、20年の務めも無事に終え、今日を迎えることができました。わたしは、これまでによき先生方に巡り会えて、数々のご教示を賜わり、この上なく幸せに思っております。少し回り道をしましたが、決して後悔はしておりません。むしろ貴重な経験をしたと思っております。定年退職後も命あるかぎり、ドイツ語の勉強を続けたいと思っております。

以上、わたしの歩んできた人生の一端を述べさせて頂きましたが、最後にわたしの最近の拙著2編をかんとんに紹介させていただき筆を擱きます。

(1) 訳書

ハインツ・グリースバハ「ドイツ語文法ルールブック」(西日本法規出版)1993年
(Heinz Griesbach: Regeln aus der deutschen Grammatik)

この訳書は、はじめてドイツ語を学ぶ学習者向けの参考書および自習書として、その使いやすさが好評であった原著を翻訳したものです。初級および中級のドイツ語の授業で学ぶ文法規則はすべて網羅しており、それぞれの文法規則を番号で検索できるように仕組みられているなどの特徴を備えています。

(2) 編著書

「新・基礎からのドイツ文法」(星雲社／西日本法規出版) 1998年
(Grundstufe der deutschen Grammatik・Verbesserte Auflage)

この編著書は、ドイツ語のABCからはじめて、ひとつひとつドイツ語の基礎の習得をめざす人々のための参考書として、また大学などで、新たにドイツ語の授業で学ぶテキストとしても兼用できるように編んだものです。本書の特徴は、発音・文法・練習問題・解答・付録の順に構成されており、全部で20課にまとめ簡潔に解説したものです。最初の第1課から第13課までは、ドイツ文を読み易くするために、一部単語にカナで表記してあります。また、本書の題文・例文の中には、とくにドイツのことわざ・箴言など名句129篇を採り入れてあります。本書を通じて、学習者がドイツのことわざ、名句にも親しみ、さらにドイツ語への関心を強く持たれることを念願しています。